

送別記念論集の刊行にあたって

文化財学科主任 古原宏伸

私たちの敬愛おくあたわざる井上薫先生は、六十一年三月本学をご退職された。遅ればせながら、また片片たる小冊子ではあるが、ここに『文化財学報 第五集』を印に付して、送別を記念し、謹んで先生に捧呈して、我々の感謝と愛情の念を表わしたい。

先生は昭和五十五年四月、文化財学科設立にともない、毛利久先生とお二人で本学に着任された。以後学科の発展を期待して情熱を注がれた先生の御努力は、今なお私たちの記憶に新しい。先生の御活躍は国立大学定年後の隠居仕事ではなく、常に私たちの先頭に立って、学科のみならず、大学全般の運営や学生の指導に誠心誠意あたられた。私はたまたま先生の講読の授業の後で、同じ教室を使わせていただくことがあったが、黒板の四方のすみに、何度も書いては消し、消しては書きした板書の文字が残っているのを見て、先生の御精進に感動したことが再々であった。テキストの丁度きりのよい処で終わっても、ベルが鳴るまでに十五分をあましていけば、先生は先きに進まれるのが常であったとは、出席していた学生の観察である。教えることを楽しんで、倦むことを知らぬ篤実なお人柄によって、先生の講席は常に満員の盛況であった。私などの最も及びがたい御高德の一つである。何よりも先生は奈良大学を愛して下さった。先生のお陰をもって、大学も学科も順調な生長をとげている。そのことを改めて心から御礼申し上げたい。

御退職後、先生は堺市博物館長の要職にあられる。美術工芸史実習で特別展の見学に伺ったとき、一行の到着を待ちかねた先生は、敷地内の大仙公園の入口まで出迎えて下さって、種々の便宜をはかって下さった。先生は在任当時と少しも変わっておられない。今日先生の一層の御活躍と御健康とを祈念してやまないのは、受業の学生と文化財学科教員一同、後学たちの等しい思いである。

昭和六十二年三月三十一日